

研究ノート

日本初のドイツ語雑誌 *Von West nach Ost* (『東漸新誌』) 序文： Was wir wollen? (「我らが欲するもの」) について

鶴田奈月、中村美里、石原あえか*

1. 書誌情報と時代背景

1889年1月、日本人による最初のドイツ語雑誌が発刊された。タイトルは *Von West nach Ost*、『東漸新誌』や『東漸雑誌』と訳される¹。副題の *Eine Zeitschrift zur Beförderung der Pflege der deutschen Sprache in Japan* は「日本におけるドイツ語振興のための雑誌」を意味する。刊行母体は独逸文雑誌会、築地活版印刷所で刷られ、広告を除けば全てドイツ語である。合冊製本のおおよそのサイズは縦25cm×横19cm、各号10数ページからなる月刊の小冊子で、少なくとも13号まで続いたことが判明している²。現在10号までしか現存を確認できないが、その内容は驚くほど多岐にわたる。森鷗外（ただしドイツ語本誌では本名の森林太郎を使用し、Rintaro Mori と表記、1862-1922）の衛生学論や演劇論もあれば、北尾次郎（本誌では *Diro Kitao* と表記、1853-1907）³のスペクトル分析についての論考や芸術論もあり、分野を横断して学術論文が掲載される傍ら、日本古典『吾妻鏡』に取材した創作恋愛小説やドイツ文学作品なども載せられ、読み物としての特性も備わる⁴。医学・文学・美術その他あらゆる方面に通じ、約19,000冊もの蔵書を遺した鷗外や、帝国大学農科大学教授として物理学や数学や気象学に従事しつつ、ドイツ語で未完の長編小説 *Waldnynphe* (『森の女神』) も執筆、これに自ら1,000点以上の挿絵を描いたばかりか、本誌の表紙挿絵も手がけた⁵。北尾が体現するような、いかにも明治らしい、混沌とした越境性を備えた総合誌といえよう。

さて、*Von West nach Ost* (以下、『東漸新誌』と表記) は『鷗外全集』に未収録のドイツ語演劇論や『於母影』のドイツ語文を掲載すると伝えられながらも、長らく存在が確認できず、鷗外研究者の間では「幻」の雑誌と呼ばれてきた。しかし1995年に井戸田総一郎が国立国会図書館に1～3号の現存を確認し、また2018年には東京大学駒場図書館が1～10号の合冊を所蔵することを村松洋が発見し⁶、鷗外研究で注目された。だが本誌には鷗外に限らず、明治の知

識人達による国境や言語を越えた営みが展開され、当時の知のあり方を伝える時代の証言としての価値を持つ。

本誌に関する情報を少し整理しておく。刊行母体の独逸文雑誌会は、1888年12月前後に設立された団体で、東京府麹町区上2番町7番地に事務所を構えた。同住所には長坂富治という人物が確認でき、「編輯兼発行人」⁷と記されている。雑誌制作の中心的人物と思われるものの、同誌の2号および3号記載の会員名簿にその名は見当たらない⁸。

会員には、お雇い外国人教師で医学者のエルヴィン・フォン・ベルツ (1849-1913) や経済学者のカール・ラートゲン (1855-1921) を筆頭に、在日ドイツ知識人たちが参加する一方、日本人では政治学者で初代東京大学総理の加藤弘之 (1836-1916) らが加わった。会は正会員・準会員・実行会員から構成されていた。実行会員は森と北尾に藤山治一 (陸軍大学教官を経て、早稲田大学初代ドイツ語教授、1861-1917) と寺田勇吉 (教育者、九段精華高等女学校創立者、1853-1921) を加えた計4名で、雑誌の編集や、懸賞課題の審査などを担当した。

会則から、本誌『東漸新誌』は、会員に配布された一種の機関誌だったことが推定される。略則の第1条に「本会ハ独逸学ノ隆盛ヲ謀リ学術上ノ智識ヲ交換スルヲ以テ目的トシ毎月一回独逸文雑誌ヲ刊行シ会員ニ頒ツモノトス」⁹とあるように、おそらくはドイツという対象の全貌把握を試みるという意味でのドイツ学振興を意図し、知識人層である会員同士の学術的交流のためにドイツ語雑誌を刊行したのである。実際、略則第5条に「会員ハ独逸文ヲ以テ随意ニ投書シ得ルモノトス」¹⁰とあり、会員の投書による編集方針が採られた。

雑誌投稿を機に、日本人会員はドイツ語を実践的に操る機会を得、また記事を介してドイツの文化を摂取し、新たな文明国として日本を発展させる糧にしようとした。こうした雑誌の役割を、井戸田は「受信と発信の統合を目指す実験の場」¹¹と称する。他方、ドイツ人会員も、雑誌を介して日本文化を知るとともに、寄稿によって日本における

ドイツ学に貢献した。このようにドイツ語を介して、日独双方から情報の発信と受信を行う場として、『東漸新誌』は明治の活発な日独交流の様相を呈する。

さて、本稿で扱う序文 *Was wir wollen?* (以下、「我らが欲するもの」と訳した邦題を主に用いる) は、1889年1月の創刊号に掲げられた巻頭記事である。署名が無いため執筆者は不明だが、上述した4名の編集委員、すなわち森・北尾・藤山・寺田が共同で執筆したと考えられる。日本人がドイツ的精神に接近する意義を文明論と絡めて説き、ドイツ学の振興を唱える本テキストは、雑誌創刊の主意を語る「宣言書」¹²と位置づけられる。

数多くの問題系を含む本序文の、より詳細な思想的分析は今後の研究に譲るとして、成立時の時代背景について、以下、簡単に解説を試みる。日本が欧米諸国と結んだ不平等条約の改正をめざし、井上馨外相時代に展開された、いわゆる「鹿鳴館外交」が代表するように、1880年代中期は欧化主義の時代と呼ばれる。日本の近代化を他国に認めさせるべく、国内の風習や制度等を西洋風に改めるさまざまな政策がとられた。「我らが欲するもの」もこの時代の影響下にある。他方、序文が書かれた1889年は、2月の『日本』新聞創刊が象徴するように、欧化主義への反動として国粹主義が台頭してきた時期でもあった。まさしく欧化志向と日本伝統への回帰の動向が衝突する時期に、本序文は発表されたのである。こうした状況下で、ドイツの文化を積極的に吸収しようと唱えていることは、この時点での編集者達の立場表明とも目せるだろう。

一方、本テキストが抱える対外思想は西洋に対してだけではない。とりわけ清国に対するアジア観も如実にあらわれる。本文中、西洋と東洋の二項対立ではなく、西洋対日本の構図を描いているあたりに、アジアにおける文明国・日本への強い自負心がうかがえる。同時に、日本をアジア諸国のなかで最上位に位置づけようとする傾向からは、太平洋戦争期の帝国主義に至る思想的危うさが既に垣間見える。

加えて同時代のドイツ学隆盛も考慮する必要がある。とくに1880年代から1890年頃にかけては、日本におけるドイツ学の振興期にあたる。1881年の政変を経て、イギリス流議院内閣制を主張する大隈重信が下野したことを機に、伊藤博文らが構想するプロシア流欽定憲法に方針が定まった。ドイツの重要性が高まったこの時期¹³、ドイツを意識した様々な取り組みが行われた。たとえば1881年9月に品川弥二郎や西周らによって独逸学協会が設立され、2年後に機関誌『独逸学協会雑誌』が創刊された。また鷗外が卒業した東京大学医学部(入学時は第一大学区医学校)では、早くからドイツ医学を主流としてドイツ語の講義が行われていたが、さらに1881年には理学部の共通必修科目が英語とドイツ語に変更され、1887年には独逸文学科が増設

された。このように政府が推進するドイツ学振興の潮流と一致する形で、独逸文雑誌会が設立され、『東漸新誌』は誕生したのである。

2. デジタル・アーカイブと翻刻

『東漸新誌』のドイツ語は「ひげ文字」と呼ばれる活字体フラクトゥアで表記されている(駒場図書館所蔵、請求記号: IV:C:397デジタル・コレクション「第一高等学校旧蔵資料」のうち、Von West nach Ost: <https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ichiko/document/d99de8a4-5abf-92ef-8efb-6770cce89e22>)。今回の訳出には、この駒場図書館所蔵本を用い、翻字も行った。ドイツ語翻字は、間違いも含めてオリジナルに即した(URLは: <https://utda.github.io/ogai/text/vorwort>)。序文の公開画像は、IIIF (International Image Interoperability Framework: トリプルアイエフ) に準拠して公開されており、テキストデータは TEI (Text Encoding Initiative: ティー・イー・アイ) ガイドラインに沿った記述を行っている。IIIF とは、2011年頃から海外の研究図書館が連携して規格開発を行っている、国際的な画像の相互運用のための枠組みである。それまで個々の独自システムから公開されていた画像が IIIF という共通仕様により公開されることで、画像の相互利用性が飛躍的に高まっている。日本においても国立国会図書館をはじめ、多数の機関で IIIF 対応システムが採用されている。

他方、テキストデータについては、人文学分野では画像公開と同様、資料に書かれていることをデータ化する作業が随分以前から各分野やコミュニティで行われてきたが、当初はテキストデータ化のルールやフォーマットは各々独自に設定されていた。そのため作成側はルール作りをまず行う必要があり、利用する側もそれらを都度把握するところから始めなければならなかった。そこで1987年に、テキストデータをよりよく作成し共有していくため、ニューヨーク州ポキプシーに人文学者と情報学者が集まり、人文学の電子テキスト資料のための構造化ガイドラインの作成が開始された。これが TEI に他ならない。その後、欧米を中心にガイドラインの改訂が精力的に行われ、現在では人文学におけるテキストデータ研究活用のためのデファクトスタンダードとなっている。TEI の特徴として、XML (Extensible Markup Language) を用いて対象テキストをタグ付けしていく方法が挙げられ、すでに広範に浸透している XML を採用することで、TEI 導入の障壁を下げている。また、欧米資料を対象に始まった TEI だが、2016年には東アジア/日本語分科会 (SIG East Asian/ Japanese) が設立されたり、2019年には国際化ワーキンググループが設置されたりして、2023年現在では人文学全般における多種多様なテキストデータの相互利用性を高めるガイドラインと

なっている¹⁵。

今回の序文「我らが欲するもの」については、当初から IIF 準拠で画像公開されていたが、テキストデータについては正書法による綴りの違いや、誤記と思われる箇所の指摘と正しい綴りの提案などをデジタル・アーカイブ上で表示させるため、また上述の如く、相互利用性、活用の可能性を高めるために TEI 準拠の記述を行うこととした。

3. 原文テキストの問題点について

オリジナルの翻訳及び注釈付与については、さまざまな作業レベルで検討すべき問題が生じた。まず本誌が刊行された1889年当時は、2023年現在の新正書法とは相当違う部分があり、特にKの代わりにC(たとえば「文化」を意味する Kultur は Cultur と表記)、Tの代わりにTh(たとえば tätig を thätig と表記)が多用されている。この傾向は、たとえば同時期に刊行されたヴァイマル版『ゲーテ全集』にも認められるもので、時代の趣向・流行が表面化した部分で誤りではない。しかし新正書法に慣れた現代読者には馴染みがないはずで、個々に現代新正書法への修正は行わないが、ここで幾つか例を挙げ、注意を促しておく。

時代の趣向という点では、現代ではまず使わない用語も散見される。そうした語彙や厳めしさを狙った文体からは、テキストを大量に読み、おそらく留学先でも劇場等に足を運び、帝国主義時代のドイツ語に馴染もうとした著者たちの姿が浮かぶ。肩に力が入った文体は読み難いが、130年前のドイツ語文を現在の文法と比較して即間違いを指摘できるかといえば、これまた容易ではない。オリジナルに忠実に翻刻したテキストを提示すれば十分かもしれないが、正確さに欠けるコンマの打ち方(不要なところに打ち、必要なところには欠如)も含めて、通常の翻刻だけでは意味・内容が非常に取りづらいことを考慮し、読者の便宜のために注を付すことにした。他方で、著者の母国語がドイツ語でないことは考慮に入れざるを得ないとして、相互の見直しや編集作業に十分な時間的余裕もなかったのか、誤字脱字の他にもテキストには明らかな文法上の誤りや不自然な言い回しもあり、さらに聞き間違い・思い違いと思われる語法・表現も散見された。これらについても注で指摘し、修正案を提示するようにした。

次節は『東漸新誌』序文「我らが欲するもの」の全訳である。語彙や構文の癖から、数名がドイツ語草案を持ち寄って序文にまとめたのだろう、少なくとも冒頭と最後の草案者は違うと推測される。本序文の内容については、井戸田が解説で核心となる部分を翻訳しているが、全訳はまだない。なお、今回の翻訳作業では、執筆者の意を汲むことを優先し、文意の伝わりにくい部分は意識したり、必要に応じて長文は分割したりした。Web 上公開のドイツ語

原文注については上述した通りだが、翻訳については概ね段落に沿って11に区切り、翻訳者が気づいた内容注(紙幅の都合上、文法上の誤りの指摘は含まず)のみを適宜付した。

4. 序文「我らが欲するもの」全文和訳(訳注付)

(1) ペリー提督が、長く鎖国していた日本を国際的民族通商に向けて開かせて以来、つまり旧世界の東の末端の国・日本が現代西洋文明諸国と接触して以来、すでに30年の月日が流れた。こうして、これまでインドシナ文化圏ではほとんど知られていなかった、法外な量の世界をゆるがす理念や新思想が日本の民族精神に雪崩れ込んできた。これは今の成長した日本と、旧体制下にあったかつての日本の状況を比較できるような偏見のない人々にとっては自明のことである。日本は中世の文明国から抜け出し、思い切って現代文明国に改変しつつあり、同時に極東のインド=ゲルマン[西洋]文化を牽引する場になろうとしている。

【訳注】1853年のマシュー・ペリー提督率いる米軍艦隊いわゆる「黒船来航」により、翌1854年に日米和親条約が締結された。「民族通商 Völkerverkehr」や「東の縁 Ostsäum」といった表現は古めかしく、現在ではまず使われない。同様に「日本の民族精神に雪崩れ込む in Japans Volksgeist eingedrungen ist」も、現在ならば「日本社会に地歩を占める in der japanischen Gesellschaft Fuss gefasst hat」とでも書くだろう。また「インド=ゲルマン indo-germanisch」なる形容詞は、現在の「西洋の westlich」と同義と考えられる。

(2) 民族性豊かな東洋において、すべてを理解して、たゆまず現代文明要素を身につけようと奮闘する唯一の国であるという考えは、我々の自尊心をどんなにくすぐることか。だが、次の問いは避けられない。すなわち、西洋の文明思想が大量に日本に雪崩れ込んだことが、日本に幸をもたらしたのか、それとも災いをもたらしたのか、という問いである。もうひとつの問いは、今日なお多くの国がかつての誇り高い過去のために苦しんでいるように、日本もまたそう運命づけられているか否か、ということだ。ベネチアのガレオン船と現代の装甲艦のように、我々なりに高度に発展した日本文化と西洋の現代文化を対峙させれば、我々が約300年の遅れをとっていることを認めなければならないだろう。

【訳注】形容詞「誇り高い」の最上級は、stolzensten ではなく stolzesten である。constrastiren は原文で何度か登場

する、辞書に載っていない動詞。本当は *kontrastieren* と書きたかったのだろうが、間違っただけなのか。さらに言えば *so kontrastiert, wie* よりも *sich so verhält, wie* と表現したほうが現代読者にはわかりやすい。なおガレオン船はイタリア（ヴェネチア）よりも、スペインが連想される。この点、ヴェネチアのゴンドラと混同した可能性も捨てきれない。「装甲艦 *Panzerschiff*」は辞書に載っているものの、現在ならば *der gepanzerte Kriegsschiff* などと表現するだろう。

(3) 低次の文明は高次の文明に屈し、またその国が高度な文明の表層的な形式受容をもって充足できるほどの力を持つた時、文明の没落が同時に国家の衰退を伴いがちであることは、残酷だが不変の歴史法則である。これらはファラオの王国でもインカ帝国でも起こった。それがどのように起こったのかを歴史は我々に教えてくれる。また起きなかったにせよ、何が起きかねなかったか、そして此度は生じずとも、常に生じた事柄を教えてくれるのである。

(4) ギリシアは尊いナイル河岸のはるかに文化的発展を遂げたエジプト人から、そしてナイル河中流域諸国から、ほとんど全ての文化要素を受け継いだ。にもかかわらずギリシアは何千年にもわたって、オリエントから西洋への侵略を阻止した。今日なおパルテノン神殿はメンフィスとエドフの柱廊が見事な神殿のはるか上で燦然と輝き、アカデメイアの森とキュノサルゲスの誉れは、今日なお、神秘に満ちたサイス神殿を凌駕している。ローマ帝国がゲルマン人の猛攻によって瓦解した時、このカエサルの後継者たちは粗野な蛮族ではあったが、何百年も続いた厳しい戦いの末、それでもかつて瓦解した世界が遺した種から、独特の近代文明を開花させることができた。

【訳注】メンフィスとエドフの神殿を修飾する *kolonal* なる語は辞書にはない筆者の造語で、おそらくどこかで知った「柱廊 *Kolonnade*」からの連想だろう。現代ドイツ語なら *säulengeschmückt* などを充てるだろう。「アカデメイアの森」はプラトンの学園を、「キュノサルゲス」はアテナイの城壁の外に隣接し、イリソス川の南の丘にあった公共の体育場（ギムナシオン）を指す。

(5) 日本人はギリシア人およびゲルマン人と肉体的にも精神的にも限りなく異なるが、高次に文明化した国々から受け取った文明要素を機械的に受容するだけではなく、同化もし、日本独自の特色と結びつけながら、ある独自の文化を発展させる素質において、せめてギリシア人やゲルマン人との類似点を示そうとする。日本文化において、その起源を中国文化に帰せない要素は皆無である。しかしな

がら、日本文化は中国文化と独特の対照をなし、日本人が中国から受け継いで枝分かれした文化のうち、多くを自家薬籠中の物にする方法を徹底的に心得ているので、中国文化から全く逸脱した文化形式を目の当たりにできると思われ、日本文化を中国文化の模造品〔コピー〕として両者を一括りに分類することなど、少なくとも誰も本気で考えていない。

【訳注】本段落は些細なことながら、誤字・脱字が目立つ（*unterscheiden*, *civilisi[e]rten* ほか）。最初の文は、副文の前にコンマが欠如、現代風に完全な文章にすれば ... *und so, sie mit seiner Eigenart verbindend...* となるか。また最後の文は文構造がおかしく、意味から推測するに ... *die japanische Cultur als Abklatsch der chinesischen anzusehen und beide in eine Klasse zusammenzuwerfen*. とでも書きたかったのか。

(6) かつて日本は、高度な中国文明の圧倒的猛攻に対して、十分な抵抗力を示し、独自の文化を築き上げた。現在は西洋文明の大波が押し寄せ、日本文化は徐々に衰退し、別の場所に押し流されつつある。日本はかつて中国文明に抵抗した時と同様に、この西洋文明の猛攻勢にうまく対抗しきれたのか。また現在、日々ヨーロッパ文明諸国から受容している文化的要素に基づいて、独自の文化を発展させる十分な力を有しているか。これについては、日本人がゲルマン人や黄金期の古代ギリシア人のように、決して外国に服従せず、またそのような荷を決して負わないと決意した一つの国である、という覚悟を自らに求める限り、また、日本人が、アジアの他国ではほとんど知られていない「絶対のノルマを求めて努力する」ことを知っている限り、おそらく是と答えられるだろう。

【訳注】最初の文にある *Andrung* は誤植で、「*Andrang* 殺到・押し寄せ」が正しい。この段落に限らないが、コンマの打ち方が正確でないため、原文の文意を汲むのに苦労した。

(7) この奮闘努力の過程で、日本ではすでに多くの失敗や間違いが生じた。だが、これは同時に日本民族が努力を知っている証でもある。日本が弛まぬ努力を止めず、西欧教育の表面的受容に決して満足せず、西欧の計り知れぬ知識や経験、あらゆる文化的要素を吸収しつつ、芸術・学問・商業の平和的競争の中で、ヨーロッパの同胞らと切磋琢磨する運命を自負する者それぞれが努力すれば、また賢明な立法が国内外の平和を維持し、個人と日本民族〔国民〕の尊厳と福祉を保障するならば、またもし日本男子の胸に古来からの武士道精神が宿り続け、兵役義務に名誉を

見出すならば、日本は希望に満ちた未来を見据えられるし、ヨーロッパ文化を表面上真似ただけのアジアの一国家ではなく、自身の歴史的使命に相応しく、極東の果ての一近代国家として、民族性豊かなアジア世界に高等教育の種を蒔く西洋文化の発信地になることが期待される。

【訳注】長い段落のため、3つに区切って注を付す。かなり肩に力が入った冒頭の一文。条件付けの副文が複数続き、誤字脱字も多く、かなり読み難い。ドイツ語では不要なアポストロフィーが付されているのは英語の影響か。最後の「西洋文化の発信地」と訳した部分の「西洋」は、原文は「ヨーロッパ=ゲルマン」との形容詞が使われ、ゲルマン=ドイツが強調されている。なお、繰り返される「努力する *streben*」の語は、起草者に森林太郎がいると思うと、つい彼によるゲーテの悲劇『ファウスト』の訳「人は務めている間は、迷うに極まったものだから。／原文: *Es irrt der Mensch so lang er strebt.*」を連想してしまう。

(8) もちろん、上の条件が揃わなければ、そうならない。まだ我々は過渡期にあり、歴史を判断するには時期尚早である。これまで我々は上手く課題を解決してきたし、概観すると、一連の近代化作業を誇れる、と思う人も多かるう。だが、我々の課題を完璧に遂行したか、と自問すれば、「否」と言わざるを得ない。我々が着手した建造物は終わりがなく、完成までゆうに数百年を要する。これまでに組んだ数個の石はどんな貢献をしたのだろうか。この巨大な建造物にごく小さな石ひとつを提供するのが、本誌の目的である。

(9) 今日、周囲を見渡せば、英国、フランス、ドイツ、加えてイタリア、アメリカ合衆国が互いに競いつつ、文明の進歩を遂げている。しかし現在、学問的観点からこれら文明諸国の先頭にあるのはどの国かと問うならば、ドイツを挙げないわけにいかない。ここにこそ今日の学問の主流の源泉があるのだ。ドイツ系学問の優位性は、あらゆる面で一般に認められている事実だ。最も堅実で、学問的かつ文学的作品のうち大半はドイツ語で書かれている。このことから、中世の日本で漢語の習得に勤しんだような熱意を持って、ドイツ語をより一層我々の身近に定着させる試みを正当化するには十分だろう。しかしながら、我々が十分には注意を払いきれていない内面的理由もある。日本人は肉体的にも精神的にもドイツ人とは異なるが、感情面においては一致するものが多い。たとえば『ヴィルヘルム・テル』や『タウリス島のイフィゲーニエ』を読む時、我々は『ハムレット』や『パイドラ』を読むのとは異なる感動を覚える。幾人かのヨーロッパの大家が指摘したよう

に、日本人にとってドイツ的感情や思想の世界に身を置くのは、フランス人やルーマニア人よりも比較的簡単なのだ。それゆえドイツ語およびドイツ文学に一層親しむことで、我々が傾聴するホメロス、アイスキュロス、ソフォクレスの名が、カーリダーサ、杜甫、李白の名とは全く異なる響きを持つ境地に達することを期待してよからう。

【訳注】長い段落の後半部分で、誤字・脱字も多い。また *sich fühlen* は再帰動詞なので、*uns ganz anders ergriffen fühlen* が正しい。『ヴィルヘルム・テル』はシラーのスイス建国の父を扱った戯曲、『タウリス島のイフィゲーニエ』はゲーテのギリシア神話に取材した戯曲で、いずれもドイツ古典主義を代表する作品。『ハムレット』はむろんシェイクスピア、『パイドラ』はおそらくセネカの劇を指す。最後に登場する杜甫や李白は日本式発音を頼りに記したのだろうが、現代ドイツ語ではそれぞれ *Du Fu* および *Li Bai* と表記される。なお、カーリダーサの誤記は、カーリダーサに正して訳した。

(10) 日本でドイツ語を振興する外的理由も付け加えておこう。外国文学に携わり始めた頃の過去に遡ると、最初はオランダ語、それから英語、フランス語、そして最後にドイツ語が入ってきた。しかしドイツ語学習は、概して医学従事者を中心とするごく少数のグループに限られ、英語やフランス語ほど一般に広まらなかった。しかし数年前から、学術目的に限らず、ドイツ語への学習意欲が活発化している。これはドイツが年々東アジア貿易で重要性を増し、日独両国のつながりが年々緊密になってきているため、豊かな響きを持つルターの言葉が、次第に日本で一般的なコミュニケーションで重要な、一般教養の一構成要素となってきた。

【訳注】「学術目的に」で使われている *halber* の使い方がややおかしい。*der Wissenschaft halber* として *um* を削除するか、*um der Wissenschaft willen* とすべきだろう。なお、最後の文の「豊かな響きを持つルターの言葉」は、彼が聖書翻訳で用いた「[新高]ドイツ語」と同義である。

(11) ドイツとの精神的交流を保つのに欠かせないドイツ語を錬磨する内外的な理由は、これで十分だろう。日本がアジア、オーストラリア、北アメリカとの商業言語である英語を日常的に使わざるを得ないのは明らかだが、結果として、日本における外国語において、ドイツ語の独壇場を望む我々の意図から現実はかけ離れている。しかしここで再度、ヨーロッパの教養を基礎に、より高度な学問的教養に到達すべく邁進するならば、ドイツ語の知識とドイツ文学への関与を避けて通ることはできない、と強調した

い。ゆえに我々はともに協会を創立し、ヨーロッパ文化に基づく日本文化の発展に深い関心を寄せる仲間たちと、ドイツ語で意見交換を始めるべく、本誌を創刊した次第である。ひとりでも多くの方が、我々の趣旨に賛同し、ご参加されますよう！

【訳注】創設された「協会」は文脈から「独逸文雑誌会」を指す。文化の「基礎」に原文は Grund が充てられているが、現在なら Grundlage を使うところだろう。すでに共通語としての英語の威力を認識しつつ、ドイツ語習得の有効性や必然性が説かれていることにも注目したい。

*執筆分担と謝辞

本稿は執筆者全員が目を通し、内容確認と校閲を行った。執筆は概ね、1節が鶴田（日本文学）、2節が中村（図書館情報学）、3・4節が石原（独文学）で分担した。ただし4節については、翻訳・翻刻・下訳までは鶴田との共同作業、その後、石原が全面的に訳の修正・補足を行い、訳注を施した。なお、本論の最終兼責任著者は石原である。

また訳注を付すにあたっては、Dr. Jutta ECKLE および Dr. Thomas EWERS のおふたりから特に有益なご助言をいただいた。ご協力に感謝する。また連動してのデジタル・アーカイブ公開にご尽力賜った本学史料編纂所および学術資産アーカイブ化推進室の中村覚先生にも心から御礼申し上げます。

⁶ 発見の経緯については井戸田総一郎、「『幻』の雑誌 *Von West nach Ost* について」、『ドイツ研究』21（1995）、pp. 107-112および村松洋、「『幻の雑誌』との出会いへの道のり」、明治大学文学部紀要『文芸研究』第138号（2019：特集 森鷗外 新資料発見）、pp. 77-81などを参照されたい。なお、同特集には鷗外の「演劇問題に就いて *Über die Theaterfrage*」と彼を含む新聲社同人たち S. S. S. による「OMOKAGE」（おもかげ）の全文訳（いずれも井戸田による）と解説も所収。ただし駒場所蔵巻には4ページほど落丁がある。石原あえかによる「解説 *Von West nach Ost*（『東漸新誌』第一高等学校旧蔵資料」https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ichiko/page/vonwestnachost_about（最終閲覧2023年10月）。

⁷ 『官報』1679号、1889年2月6日。

⁸ 井戸田（1995）、注6。および井戸田（2020、注4）によると、1889年3月30日の第3号の名簿には89名分の氏名が記載されている。他方、駒場図書館所蔵合冊本には名簿は欠落。

⁹ 広告欄「独逸文雑誌会略則」、『日本文学』第5、1888年12月18日。引用に際して新漢字に改めた、以下同様。『学海之指針』第18号、同年12月25日にも同じ主旨の文言が確認できる。

¹⁰ 注9の広告欄「独逸文雑誌会略則」。

¹¹ 井戸田総一郎、『演劇場裏の詩人森鷗外 若き日の演劇・劇場論を読む』、慶應義塾大学出版会（2012）、p. 83参照。

¹² 井戸田（1995）、p. 111より引用。

¹³ 同上、「明治政府の文教の強いバックアップのもとに、ドイツ語教育はまずその最初期を迎えた」と言われる。

¹⁴ 本稿では、分析・解釈対象である『東漸新誌』序文の文章を〈テキスト〉、コンピュータ用語の文字データを〈テクスト〉と区別して用いる。

¹⁵ 人文情報学研究所監修、『人文学のためのテキストデータ構築入門：TEIガイドラインに準拠した取り組みにむけて』、文学通信（2022）を特に参考にした。

¹ たとえば森鷗外主宰の『文学評論 しからみ草紙』創刊号（1889年10月）の裏表紙には『独逸文雑誌 一名 東漸新誌』第9号の広告がある。ちなみに同広告には、掲載小説『吾妻』の著者として、「（北尾次郎）」と明記されている。他方、ドイツ語オリジナルでは、Anathol Schumrich なる筆名が使われており、井戸田は Karl Adolf Florenz (1865-1939) との仮説を立てたが (Itoda, Soichiro: *Von West nach Ost. Die erste deutschsprachige Zeitschrift in Japan*. In: *OAG Notizen*, 6 (2020), S. 8-21, 特に S. 14参照)、この日本語広告から、実際の著者はむしろ北尾である可能性が高いと考えられる。

² 『官報』2090号、1890年6月19日。

³ 廣田勇、「北尾次郎の肖像 気象学の偉大な先達」、日本気象学会『天気』第57巻12号（2010年12月）、pp. 909-916。また挿絵画家としての北尾については、西脇宏・猿田量・若林一弘、「知られざる北尾次郎 物理学者・小説家・画家」、島根大学山陰地域研究総合センター『山陰地域研究』5（1989）、pp. 57-74ほか参照。

⁴ 10号までの全目次は注1の Itoda, Soichiro: *Von West nach Ost* (2020) を参照。

⁵ 広瀬毅彦「ジャポニズム作家としての北尾次郎」、『北尾次郎とジャポニズム』北尾次郎ルネサンス報告書別冊（研究代表者・西脇宏、2019）、pp. 3-20、特に p. 13に『東漸新誌』表紙についての言及がある（北尾のモノグラムほか）。ちなみに p. 21以降には北尾がドイツ留学中に描いた挿絵作品集。

Über das Vorwort „Was wir wollen?“ Die japanische Übersetzung und die Geschichte der Entstehung der ersten deutschsprachigen Zeitschrift in Japan: *Von West nach Ost*

Natsuki TSURUTA, Misa NAKAMURA, Aeka ISHIHARA*

Im Jahre 2018 wurde im Komaba-Campus an der Universität Tokio die erste deutschsprachige Zeitschrift in Japan wiederentdeckt: *Von West nach Ost* (Inventar-Nummer IV:C:397). Es handelt sich um einen 170-seitigen Sammelband (Bd. 1-10), in dem jeweils die Vorder- und Hinterseiten der Umschläge sowie die Vorsatzblätter der einzelnen Bände fehlen. Mit Ausnahme der Anzeigen auf der hinteren Umschlagsseite ist alles auf Deutsch geschrieben und in Fraktur gesetzt. Die Herausgeber, zugleich Vorstandsmitglieder des „Vereins für eine deutschsprachige Zeitschrift“, sind vier japanische Gelehrte mit guten Deutschkenntnissen: Rintaro MORI (Künstlername Ogai MORI, 1862-1922), Diro KITAO (1853-1907), Harukazu FUJIYAMA (1861-1917) und Yukichi TERADA (1853-1921). Diese vier Männer verfassten gemeinsam das Vorwort bzw. die Zielstellung der neuen Publikation unter dem Titel „Was wir wollen?“ im ersten Band (Januar 1889).

Der Originaltext ist als Digitalisat bereits seit Februar 2023 auf der Webseite der Universitätsbibliothek in Komaba (S. 1-3) abrufbar: <https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ichiko/document/d99de8a4-5abf-92ef-8efb-6770cce89e22>. Zur Veröffentlichung in diesem digitalen Archiv werden hier das IIF International Image Interoperability Framework (Triple-IF) und das Markup der Text Encoding Initiative (TEI) verwendet. (URL: <https://utda.github.io/ogai/text/vorwort>). Der Originaltext ist hier transkribiert, wobei Passagen mit heute nicht mehr gebräuchlichen Wendungen entsprechend kommentiert werden.

Der Text selbst ist hochinteressant, weil der Leser darin den damaligen Gebrauch der deutschen Sprache und ihre Rezeption in Japan erkennen kann. Aber ihn zu lesen ist ziemlich schwer: Dazu tragen seinerzeit übliche, aber heute nicht mehr verwendete Ausdrücke sowie grammatische Fehler und falsche Interpunktion bei. Darüber hinaus bemühten sich die Herausgeber, stolz auf ihre deutschen Fremdsprachenkenntnisse, um einen gehobenen Stil, mit dem Ergebnis, dass viele Sätze sehr kompliziert und lang

geworden sind. „Was wir wollen?“ spiegelt den damaligen Zeitgeist in Japan – nicht nur im literarisch-wissenschaftlichen, sondern auch politisch-diplomatischen Sinne – wider. Am Ende dieses Berichts befindet sich die erste japanische Übersetzung des gesamten Textes. Um diese inhaltlich besser zu verstehen, wurden notwendige Kommentare hinzugefügt.